「人間も生態系の一部」脱炭素と生物多様性保全を場で捉えて繋いでいく

株式会社漁師鮮度　代表取締役
岩井克巳氏

── 進められている環境保全事業の経緯を教えてください。

海の環境を整える役割をもつアマモが生育できる海は、大阪府下で非常に限られているのですが、私たちが事業を行っている阪南市は、埋め立て事業などの開発を受けなかった歴史から、アマモが生える美しい海洋環境が残っています。そこで環境保全事業の1つとして、このアマモ場を保全する活動に取り組んでいます。

一方で、都会に住む人の多くは、大阪湾にきれいなイメージはあまりもっていません。そこで、実体験を通じて大阪湾のことを知ってもらうため、市民向けの環境保全事業を始めました。

その際注目したのは、大阪府下で唯一継続されている3か所の海苔養殖場。海苔養殖が可能なのは、豊かな海洋環境があるからです。

海苔養殖を体験してもらうといっても、海苔を作って食べるだけでは、面白くありません。海苔といえばおにぎり、ということで海苔養殖と米作りを一緒に行い、陸と海の繋がりも同時に体感してもらえるようなストーリー型のイベントを実施しています。

── 環境保全事業を進めながら、感じている変化はありますか。

漁師鮮度は、「ここに来れば誰かがいる」「子どもも大人も安心して海とふれあえる」「大阪湾の美味しい魚が味わえる」そんな地域のプラットフォームを目指しています。今の親世代の多くが、大阪湾は危ない場所であり、行ってはいけない場所という認識でした。しかし、アマモ場で生き物観察をした子どもたちが、家でアマモの話をするので、少しずつその認識が変化してきたように感じます。放課後にカキ小屋で、宿題をしに来る子もいます（笑）。子どもの実体験を通じた学びが、じわじわと周りを変えていっているようです。

アマモ場での生き物観察

── 環境保全事業の取組から脱炭素と生物多様性保全を繋げるヒントなどあれば教えてください。

何を考えるにしても「場」として捉えることで、持続可能性が高まるのだと思います。

例えば、海洋教育という取組を阪南市で進めています。「海洋」だからといって、海を拠点に学ばなければいけないことはありません。時には、山に入っていって、学ぶこともあります。それは、阪南市の豊かな森や里が、阪南市の海をつくっているからです。

また、豊かな環境を保全しようと考えるのなら、人間がそこで生活し、適度に手を加えていくことが重要です。それは、人間も生態系の一部であるからです。

今起こっている様々な問題の根本的な原因は、人間が生態系の限度を超えて、自然に手を加えたことです。自分のいる地域を大きな「場」で捉え直し、その「場」のために、自分たちがすべきことを考えられるようになったらいいですね。

［聞き手：つな環編集部］

岩井　克巳（いわい　かつみ）
阪南市を中心とした大阪府南部の泉州地域で、アマモ場再生を核とした海洋教育、カキ小屋を核とした浜の活力再生を指導・実践。
2018年11月「全国アマモサミット2018in阪南」実行副委員長、2019年6月「G20大阪サミット配偶者プログラム2日目」現地コーディネーター、2019年4月より阪南市海洋教育推進協議会委員。